

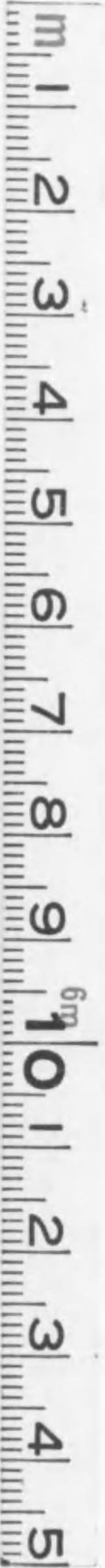
特52-338イ



1200800238331

148

217



錦雞仙史 金井之恭君題字
農學士 今井秀之助君序
農藝化學士
蓑笠學人 永澤小兵衛編著

青 根 温 泉 志 完

明治廿七年十月訂正五版 永澤氏藏版

始



俗漢



香坐

德身



歲至辰桂月於儂
台室舍

錦形之某題



青根温泉志序

天の萬物を生ずる豈に偶然ならんや、海濱には魚鹽の利あり、山谷には鑛泉の惠あり、而して人世の苦境にも亦樂土の存するあり、然れども苦樂亦一ならず、或は耽慾荒淫以て生を貪るものあり、清雅高尚以て世を樂むものあり、徒に生を貪る者與に語るに足らず、眞に世を樂む者得て山水の秀靈、雲烟の變幻を説くへし、惟ふに鑛泉の効は専ら治疾にありと雖も、其眞味に至りては蕩邪流惡、氣を吸ひ神を暢ふるに外ならず、ウアルトン氏曰く、景色の變換も、亦一二の疾病を治するの効あり、例へば鬱閉症の患者、都市を去りて閑豁の地に移り、周圍の綠陰ある山水の幽景を遍覽して、遂に快治するか如しと、以て證すへし、仙南青根温泉場は、山高く、水清く、眺臨の爽豁ある室宇の雄壯なる、吾縣下三十餘泉に卓絶す、是を以て四時來

り深浴する者、年に十萬人に下らすと云ふ、余嘗て青根に遊び、その造化の大觀を賞し、また一書の之を記述せしものあきを惜めり、近頃、知友永澤君、温泉志を著はし、余に校閱を請はる、此書素と一小冊子に過ぎすと雖も、克く其梗概を悉せり、謂ふへし、青根温泉の知己ありと、夫れ山靈地異、何ものか人の稱揚を嫉たさらん而して、今や景と書と相竣て始めて完璧を成す、余復た何をか惜まんや、寄語す、世の精神を養ひ樂土を探らんと欲する人、一たひ此好侶を携へ、飄然去て朝には不忘閣畔に清泉を掬し、暮には翠嶂館上に風光を弄し、以て天の萬物を生する實に偶然にあらざるを知れ、是を序とす、明治二十四年七月下澣、仙臺僑居南窓下に於て

今井秀之助撰

自叙

佐藤醫學博士嘗て温泉誌の必要を論して曰く、「人の生を養ふの多しと雖も、之を要するに、身、体、と、精、神、を、養、ふ、の、兩、途、に、外、あ、ら、さ、る、あ、り、。而して、之、を、養、ふ、の、法、少、あ、ら、さ、ず、と、雖、も、自、ら、弊、害、あ、し、と、せ、す、。余は常に兩あから之を養ふに最も益多く、害、少、あ、ら、さ、者、を、温、泉、と、あ、す、。抑も温泉の健康に益あり。疾病に効あるものは、各温泉中有効の物質を含みて諸般の性質或は疾患に適應するに因るのみにあらず。加ふるに土地多くは閑雅幽邃。樹木蒼鬱。空氣新鮮。自ら山水の景ありて人の神思を暢はしむるに由あり。然り而して温泉に浴する者は固より豫め温泉の効用利害より。土地の寒暖。高底。浴法等に至るまで詳かに知らざる可からず。近頃世俗を見るに。浴泉大に行はれ。温泉の効用を詳かにせずして。漫りに痼疾を山谷に載するものあり。却て害を招くに至る。偶々温泉に由て癢を起し奇驗を見るものあるへしと雖も。是必竟温泉に由て病を試むるの徒のみ。

僥倖と云ふべし」と。余の斯篇に於けるも亦此意に外ならず。然れども素と薄識寡聞。特に醫事に暗し。焉んぞ克く虎を畫て犬に類するの誹を脱れんや。唯頼ひに諸大家の校閲の勞を取らるゝと。平素聊か抱負する所あるを以て。自ら掃らす操觚の重任を負ふ。浴者みれに依りて萬一を裨益せは。啻に余か面目たるのみならず。また泉主の大幸あらん。

明治廿四年七月下浣

養 笠 學 人 識

凡 例

一本書は青根温泉主佐藤氏の需に應し、拙著宮城縣鑛泉誌より本泉に關する記事を轉載せる所なり、故にその詳細を知らんと欲する浴客は請ふ鑛泉誌に就て一讀の榮を垂れよ。

一書中氣候の温度は華氏檢温器を以てし、泉質は設氏を以てす。

一本書載する所の名區の外青根の附近は、籠山、鬼石原、七日原、等の勝區に乏しからすと雖ども、此等は既に宮城縣鑛泉誌に於て、遠刈田温泉の條下に附記したれば今ゝに載せず。

一今回本書を第五版に附するや、一二増訂を加ひ又新たに圖畫を添附せり、然れども猶ほ誤脱の多からんを恐る、覽者諒焉

明治廿七年十月上浣

編 者 誌

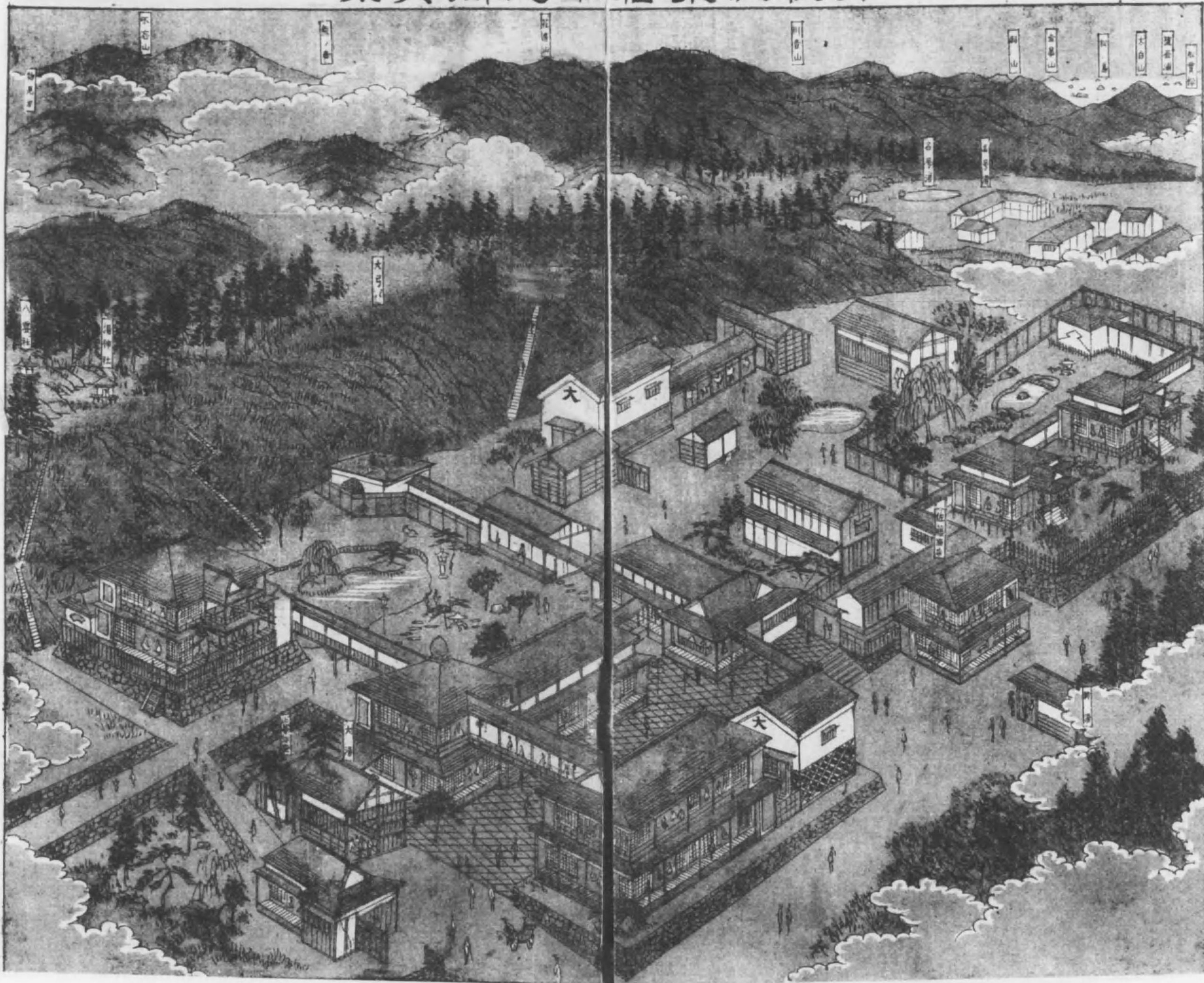
目次

| | |
|-------|-----|
| 一浴者心得 | 三頁 |
| 二地理 | 七頁 |
| 一位置 | 九頁 |
| 一地質 | 九頁 |
| 一氣候 | 十一頁 |
| 一浴場 | 十一頁 |
| 一泉質 | 十三頁 |
| 一効能 | 十四頁 |
| 一來歷 | 十五頁 |

目次

| | |
|------|-----|
| 一湯戶 | 十八頁 |
| 一浴客 | 二十頁 |
| 一交通 | 廿一頁 |
| 一詞藻 | 廿二頁 |
| 一散策地 | 廿六頁 |
| 一社寺 | 卅三頁 |
| 一物產 | 卅四頁 |

青根温泉宿不忘真景





●浴者の心得



抑々鐵泉の効能は全たく其中に含む所の諸成分に由ると雖も、亦此一點にのみ歸す可きものにあらず土地の高低、氣候の寒温、近圍の風景、浴場の陋美、食物の良悪等は、皆奏功の如何に關係を有すれば、若し其詳細を知らんとする病浴客は須らく良醫の指揮に従て潔浴するを良とす、況んや鐵泉浴療の目的は、重に慢往諸病に應用するにあれば、假令輕微ありと雖も之を急性諸症に濫用す可からず、又其應用法の如きも泉質の異同、強弱、疾病の種類輕重等に因て差異あるものあれば、固より一定の規を以て羈絆す可からずと雖も、通常心得とあるべき要件を左に摘録す

◎第一 鐵泉療法に適するの時期は本邦に於ては凡ろ四月一日より、十月一日に至る間を最良の期と爲せども、土地、氣候の寒暖に因て適宜伸縮せざる可からず、又温暖の地に於て冬期浴療を爲さんとせば、宜しく浴室の構造に注意して、隙風

の竄透を防ぐ可き装置すべし

◎第二 療病者入浴時日の長短は、其人の體質、及び鑛泉感應の弱強に因て各々異なる所あれば之を定むること甚だ難し、然れども三週間を以て通規と爲さば大過無きもの、如し、固より病症の模様に従て之を伸縮するは勿論あれども、連綿入浴して四、五週間の久きに彌るは却て悪し

◎第三 浴場に若し身軀疲勞せるもの、飲食を定め静息して攝生を守るものと一二日後、飲用、浴用を始むるを良とす

◎第四 飲用法の分量も、鑛泉の性質と、病症、軀質に由て一定せず例へば含鐵泉の如きは食鹽泉或は亞爾加里性炭酸泉に比すれば、大に分量を減ぜざる可らず凡そ飲用は先づ少量一回凡そ三勺餘位一より始め、患者適宜の量に至るも、一日の量凡そ五合五勺を越ゆ可からず、又浴間には浴槽中の不潔泉を飲用する者あれども、是は大なる過失あり、飲料は必ず泉源の清潔あるものに就き温度高きに過

ぐるときは、放冷して適宜に至らし先服用すべく、又必ず急忽にせず徐々に爲すを要す、其適當の時は朝は七時、八時夕は五時、六時の頃を良とす、飲服後少しく運動を爲すべし

◎第五 入浴は一日一回或は二、三回患者の適意に由るべし、朝は八時、九時夕は五時、六時を長期とすれども空腹又は滿腹のときは共に宜しからず、然るに浴度多ければ効能速ならんと妄想し一日數回の浴を取り爲めに皮疹、浴熱等を發し、甚だしきに至りては危篤の患者を招くものあれば必らず多浴を慎むべし

◎第六 入浴中の時間と温度とは亦鑛泉の性質と、患者の病性、軀質とに由て同じからせ、初時は概して入浴時間を短くし、漸々之を長くすべし、即ち初は十分時より漸く慣れて堪ゆるに従ひ、長きは三四十分に至るものとあり、凡そ成分少量なるものは刺戟少きを以て、他の強性鑛泉よりは、長く入浴するを得るものとす温度も亦病性、軀質等に從て同一ならず、本邦に於ては習慣に由て高度の温を

用ゐるもの多し、然れども高度の温を用ゐるは宜しからざるも多し、温度は冷
あるも攝氏二十九度より以下なるべからず、熱あるも四十二三度を超ゆべからず、
但し醫師の特に冷、熱を指揮するものは此限外ありとす

◎第七 浴後ハ乾きたる浴巾を以て全身を拭ひ乾かし、強く摩擦するを良とす、而
して直ちに衣服を着し、晴天の日は三十分位の散歩をなし、雨天あらば室内に於
て適宜運動するを良とす、然れども倦疲の餘これをあすを好まざる時には強てあ
す可からず

◎第八 入浴の間若くは皮膚疹を發せまどきは一時中止するか或ひは、鑛泉に常水を混
じ稀釋すべし、又入浴の爲めに發熱するもどあり、然るときは數日浴を止め、飲
用を減す可し、又世には甲泉に入浴して未だ數日を経ざるに、更に乙泉に移り、
次で丙泉に轉ずるものあり、是は徒らに身軀の疲勞を増すのみにして、効驗も亦
少なければ必ず禁すべし

青根温泉志

仙臺 蓑笠學人 編著

●地理

青根温泉は宮城縣陸前國柴田郡(古書に芝田とも書せり)川崎村字前川にあり。柴田
郡は國の極南に位るし東南の二方は磐城國刈田、伊具、亘理の三郡と互ひに境界を接
し、北は全く名取郡に包まれ、西は大山脈を限りて山形縣羽前國と隣る、郡中山岳
多く之より流出する大小の河川も亦頗ぶる多し、東西九里、南北六里、面積十九方
里にして戸數三千七百餘人口凡そ三万を有す。前川は往時、砂金莊に隸し、獨立の
一村ありしが明治二十二年今宿、小野、川内、元砂金の四村と合併して今名に更たむ
る所なり。

此地より東北、川崎驛へ山道三里、西南岨々温泉場へ一里半、東南遠刈田温泉場へ
一里十三町を距て、大河原鐵道停車場へは凡そ七里半とす、而して仙臺に通ずるに

二道あり、之を右すれば永野、宮、大河原の諸驛を経て直ちに瀛車に投ずるふとを得
 且つ道路平夷にして車馬を疾驅せしむるの便あれば十六里半の長途も僅かに半日を
 費さるべく、又之を左して川崎驛
 を通過し名取郡岩沼鐵道停車場に達
 すれば、行程十二里に充たざれども
 中間諸處に山阪ありて馬にあらざれ
 ば通ぜず、聞く早晚此地と遠刈田間
 に馬車鐵道を敷設し、専ら浴客來往
 の便を圖るの計畫ありと。又この地
 より山形縣に通ずるには從來笹谷嶺
 の險難ありて往來極めて容易あらざりしも、今や開鑿工事將にその功を竣へんとす
 るに至りたれば、是より兩縣交通の便實に尠少にあらざる可し。



(景の堂音觀嶺谷笹境縣形山)

●位置

青根温泉場は不忘山の分脈にて花房山の中腹ある青根と稱する地にあり、西方に不
 忘山を負ひ、西北に花淵山を控へ、西南に物見岩、倉石山を望む、而して六方山、
 川音岳等は北方に並峙するを以て地勢は自づから雄壯高隆を極め海面を抜くみど殆
 んど二千尺、遙かに東、南の二方を開き之を遠くしては宮城、桃生、牡鹿の諸勝を
 歴々眼下に點綴し、之を近くしては、刈田、名取、黒川の峯影水態、盡とく坐席に入
 り來る、その開豁の眺望は他温泉場になくして特り青根にある所ろあり、佐伯羽北
 曾て詩あり能くその實境を寫出す。

遮絶炎塵氣爽哉。三層樓上小樓開。盤中何恨佳肴乏。千里江山入酒杯。
 此地人家十四戸あり、五戸は温泉宿を業とし他は皆浴客に需用品を鬻ぎて生計を營
 なむ。

●地質

青根温泉志

地盤は西境なる中央大山脈を組織せる岩石と同質の火山岩より成り、地味は同岩の霽爛朽敗したるものに、古代の噴灰を多量に含蓄するを以て通常耕作に適せず、而して此地に於ける地震は常に最も少く、且つ震動輕微にして開湯以來未だ其害を蒙ふりしむとあしと云ふ。是れ位置を地盤の鞏固なる高處に占むると深豁幽間を以て四方を周らすによるなる可し。近傍に火山質結晶片岩を産す、頗る庭石、飛石等に適せり、土俗これを片石と稱す。

◎飲料水 水は飲料雑用ともに、數條の筧を以て、谿谷の清水を導ひき來る、其距離三四町より半里に餘る、去る明治廿二年三月中陸軍一等軍醫正中泉正氏は二種の水質を分拆試験せしにその成績は左の如く良好なりしとぞ。

| | | | | | | | |
|-----|---|---|----|-----|----|--------|---------|
| 種類 | 臭 | 味 | 清濁 | 亞硝酸 | 硬度 | 有機物 | 顯微鏡所見 |
| 飲料水 | ○ | 淡 | 透明 | 痕 | ○ | 一、四二、〇 | 一、九〇 |
| 雑用水 | ○ | 淡 | 透明 | 微 | ○ | 一、七二、五 | 二、六九 |
| | | | | | | | 少量ノ植物殘渣 |
| | | | | | | | 植物殘渣 |

●氣候

土地高峻境區幽僻あるが故に寒氣猛烈にして、殊に冬期は西北の強風多し。降雪は毎歲十二月に始まり、翌春三月に至りて消解す、その間稀には華氏廿二度に降ることも無きにあらずれども、夏季は大氣清涼にして三伏酷熱の時すら猶は朝夕は七十度に騰るものとなく、日中は八十五度に過ぎず、故にその地夏夕蚊帳を用ゐるの煩ひなし。温泉は曇天、雨日に温度を増し、風日には稍熱度を減するを常とし、大雨の後谿水漲溢するときは亦著るしく泉量を増加し且つ泉熱を減するものとあり。

●浴場

温泉の湧口は三ヶ所にして浴室すべて六字あり、即ち大湯、瀧湯、上等浴室、上新湯、下新湯、及び名號湯とす、又別に室湯數槽あり。

◎大湯 浴室を距る數歩、佐藤仁右衛門居宅の傍はらに涌出づ、埋樋を設けて之を導びく、泉源は頗る廣大あるを以て、その泉量の多き世稀に見る所にして、二條

の瀑状をあして浴池に瀉ぐ、泉質は透明瑩徹、能く池底の秋毫も數へ得べし、浴室(六間四間)は廣潤清淨にして浴池(五間二間半)は軟石を以て之を疊む、傍はらに上等浴室(二間半一間半)あり大湯を導びき、賓客澡浴の用に備ふ。

○瀧湯 大湯の剩泉を導びきて瀑状とあし、浴室を東の方、數十間の崖腹に造り、局部病者の療浴に供す、又下新湯の室内に一浴池あり、みれまた大湯を導びく。

○新湯 源泉は浴室(三間二間半)の西北八町餘の谿間に涌出づ導管を敷設して之を引來り大湯の北數十間の處に浴池(二間半一間)を造りて上新湯と稱し、更にみれを大湯の東、丹野七兵衛門前にある浴室(四間に三間半)の浴池(二間半一間半)に導びきて下新湯と名づく、此他枝泉を名號湯の傍らに引き、方一間許の小浴槽を据ゑて入浴に供するものあり。

○名號湯 大湯の北凡そ二町、日吉小祠の下より涌出づ、長十間許の埋樋を以て浴室(五間二間)の傍はらある小池に瀧溜し更に篋を以て浴池に導びく、浴池はすべて

木造にして其大さ殆んど上新湯に同じ、新湯の枝泉を導ひける浴槽はろの傍はらにあり。

●泉質

○大湯 宮城縣衛生課に於て施行せる定量試験の成績に據れば此温泉は弱塩類泉に屬し泉温は設氏の四十三度、浴池は四十度にして硫酸加留母の〇、〇六一六、硫酸那篤留母の〇、二三七二、格魯兒那篤留母の〇、〇八五一、炭酸那篤留母の〇、〇七八七、炭酸加兒瘦母の〇、〇三八〇、炭酸鐵の痕跡、有機物の痕跡、游離及半抱合炭酸の〇、〇七八七、硅酸の〇、〇四二〇を含み固形物物量は(一リール中)〇、五四二六なりとす。

○新湯 宮城縣衛生課の定性試験成績に據れば此温泉は鹽類泉に屬し、大氣温廿九度の時泉温は設氏の五十六度、浴池は四十二度にして泉質は透明無色、且つ無臭なるも褐色の沈着物あり、其浴池に瀧溜するものは稍白濁を帯び中性の反應を呈し味

ひは大湯と同じく稍鹹澁にして硫酸亞兒加里の多量、鹽化亞兒加里の中量、格魯兒那篤留母の少量、炭酸石灰の少量を含み固形分の總量は大概一千分の一なりとす。

◎名號湯 宮城縣衛生課の定量試驗成績に據れば、此温泉は鹽類泉に屬し泉温は設氏の五十二度、浴池は四十三度にして硫酸加留母の〇、一〇八〇、硫酸那篤留母の〇、二一七五、格魯兒那篤留母の〇、三五一七、炭酸那篤留母の〇、一五二三、炭酸加爾瘦母の〇、〇九八一、重炭酸亞酸化鐵の痕跡、有機物の痕跡、硅酸の〇、〇四八五、游離及び半抱合炭酸〇、一三一四を含み固形物總量は(一リール中)一、一七五ありとす。

●効能

◎大湯及び名號湯醫治効能 各種の慢性癱瘓質斯及び仮性關節強直、或ひは癱瘓質斯性筋肉彎縮性、慢性痛風、諸瘡衝或ひは創傷後の浚出物或ひは組織肥大、例令ば慢性肋膜炎、子宮周圍蜂窠織炎、骨盤内膜炎等の浚出物を吸収して其肥厚を解散

す、又神經機亢盛の諸症或ひは各種神經の麻痺、久經の腦脊髓、中風、中覺過敏、依卜昆垓里、歇私的里、神經衰弱症等に効あり。

婦人生殖器の慢性諸病、貧血諸病及び萎黃病、腺病又は重病後の快復期、慢性皮膚諸病、頑固潰瘍、遲鈍性創傷、瘰癧及び骨瘍、慢性貌禮篤病、腎孟加答兒、其他累久の株毒、水銀劑療法後等の患者には其時期を選び用ゐて併せ効あれども新發の腦中風、脊髓勞腦、腫瘍等より來る漸進麻痺には禁ずべし。

◎新湯俗傳効能 金創、打撲、疝氣、挫傷、湯火傷、蟲類咬螫毒、癩麻質斯、痔漏、腹胃諸病、赤白帶下、皮膚諸病、婦人生殖器諸病、脚氣等あり。

●來歴

◎大湯 傳へ云ふ、昔時本郡前川村字八澤屋敷に佐藤彦惣ある者あり、天文十五年四月佐藤喜右衛門、丹野七兵衛、佐藤權十郎等と相伴ふて深く山徑に入り、農蓑を編製する料にとて、古き樅木を伐採し、乃て樹皮を剝がんと根傍に近づきしに、其周

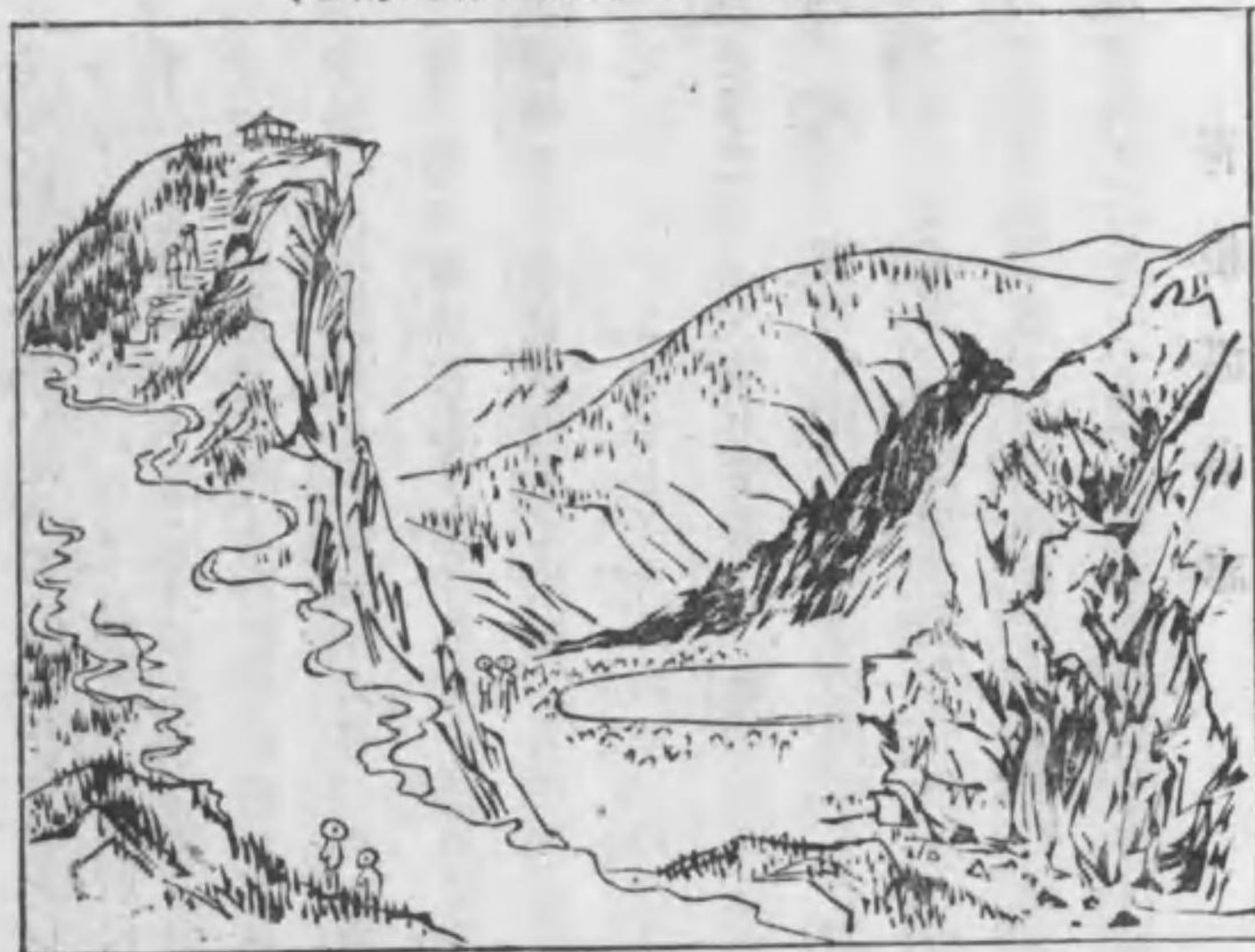
邊より温氣微かに昇騰して沸々湯泡を發生す、四人怪みて地を穿つゝ未だ幾尺な
 らざるに、果して一泉を獲たり、樞不俗に呼びて青木と云ふ、依て發見の温泉を青
 根温泉と名づけ、地を青根と稱し是より四人居を此地に移し互ひに協力して荆棘を
 開き、湯槽を設け客舎を築き以て澡浴に資す、爾來連綿として子孫今日に繼續すと。
 按ずるに。彦惣の後裔佐藤氏所持の古文書に。其祖先は八澤豊後と稱し寛正年中
 (凡四百三十年前)まで前川村八澤屋敷に住し。世々川崎の城主。砂金佐渡の家老た
 りしが。天正年間掃頭の代に二男彦惣を青根に移すの一項あり。前説と符合す。然
 れども青根名稱の起源に至りては。頗る卑俚に近くして容易に信すべからず。此
 地もと樹林蒼翠土地高峻なるを以て或は青峯。蒼嶺等の文字を填用する者ありと
 雖ども。皆みれ風騷者流の好事に過ぎず。
 又按ずるに。青根は北海道舊土人語の所謂「イワチ、ナイ」か。イワチ之を約すれば
 ワチにしてアチと通じナイも亦子とある。即ち「温泉涌出地」の義とす。或はまた單
 に「ワチ、ナイ」即ち善知鳥澤の義歟。善知鳥は俗にウトフ鳥と呼び。其形雉子鶴に
 似て大さ小鴨に類し。嘴は太くして前尖り。眼下肉つきの處高く出てたり。故に海
 角又は山端の高く出てたる地をウトフといふこと。古くより我奥州の方言に止ま

らず。遂に諸國の地名と成れるもの多し。是れ皆舊土言ワチ即ち善知鳥より其意義
 を取り來りたるものなり。現時猶ほ諸所にワウ(王)澤。若くはチウ(翁)澤の地名を存
 するは其源をワチ澤に發するもの多し。美濃國御岳驛東のウトフ村。信濃國のウト
 フ坂(鳥頭と書す)等も亦概ね此類ありとす。

◎新湯 此湯は始め享保五年六月、彦惣等子孫の發見する所に係り、一たび開湯せ
 しも、通路險惡にして浴するもの極めて少きにより、幾くもあく廢湯に歸せり、
 其後榛莽の中に埋没して世に知られざるものと數十年ありしが、明治八年再び之を掘
 鑿し、遂に埋樋を通じて今の浴室に導びき同年十一月を以て浴用に供せり、故に此
 稱ありと云ふ、去れども上ノ新湯は二三年前より復た廢湯に歸せり。

◎名號湯 天文年間、彦惣等の開湯する所にして、發見の大湯と同時にあり、口碑
 に名號湯は病者、彌陀の名號を唱へて入浴すれば、宿痾忽ちにして癒たるより起れ
 りと傳ふれども、奥羽觀迹聞老志青根温泉の條下には東北有古温泉曰女御湯と、寛
 永十九年五月二十五日の青根屋敷字入持高調の古記には、妙子下屋敷と、又封内風

(む瞰を沼王藏りよ上頂嶽田刈)



十八
土記、柴田郡前川村の條には、湯泓有
二、其一號大湯(中略)其二號妙護湯と
書し一説には泉源に阿彌陀佛の堂ある
を以て名づく、諸説區々にして其孰
れか真あるを詳らかにせず。

●湯 戸

湯主にして温泉宿を兼ねるものすべて
五戸あり、皆湯泓に傍ひ業を営めり、
その大湯に接し、新湯に隣るものは佐
藤仁右衛門、丹野七兵衛、佐藤重太郎の
三戸にして仁右衛門は古來不忘閣と稱
し大小八十區の客房を備へ舊藩の頃は

永々湯守を命せられ、七兵衛は翠峰館と稱し、重太郎はその南隣にして新湯と相對
す、又名號湯に屬する者は佐藤文四郎、丹野七三郎の二戸にして各々二十の客室を
有す、去れば浴客群至に際會すれば千三百餘名の大衆を容るゝに餘りありと云ふ、
之を要するに青根は浴室より坐席、器什に至るまで、萬般に清潔善美を盡し、就中
建築の宏壯雄偉なるは、ろの風光の佳絶と併せ賞して、管内無双と稱するも、亦敢
て誇言にあらざるが如し。

◎諸費 凡そ浴客の湯戸に投するや、必らず旅籠、自炊何れにか依らざるべからず、
旅籠は通常みれを上、中、下の三級に區別し、一晝夜の宿料は上等を三拾五錢とし、
中等を三拾錢とし、下等を二拾五錢とす、而して自炊は油費を除き薪炭料、席費と
して一日金八錢より六錢五厘の間を納る、普通の寢具一襲の損料は一週間金二十六
錢乃至三十四錢にして、その特に暖衾錦褥に起臥せんと欲せば須らく五拾錢以上壹
圓五拾錢を投するを要す、入一週間貳參圓の席費を納るれば、一室を擧げて客の自

用に充つるふとを得べし。

◎需用品 日常必需の物品は、概むね之を温泉宿に備へ置き野菜果實の類は、毎朝市場に於て求むるふとを得れども、若し欠乏を告ぐるときは郡内大河原、村田の二驛、若くは刈田郡白石等に仰ぐが故に、不自由を感ずると極て少く、朝夕は鬼石原牧場に於て搾取せる濃厚の牛乳を飲用するの便あり、然れども別に嗜好の食料、香料、紙筆の類は預じめ携帯するに及かず。

●浴客

従來の經驗に依れば、浴客總數は例歳十万人以上に及ぶ、蓋し此地は最も夏秋の遊浴に適すると、刈田岳登攀の行者夥たゞしきに因る。就中病客の多くは子宮病、上衝、眼疾、脚氣等の患者にして、春は養蠶家多く、夏は官吏、學生都人多く、秋は農商家群集してその熱鬧殊に甚はだし、之に反して初冬は避喧の人に多しとす、而して此間最とも難踏を極むるは八月中旬より十月中旬に至る三月間にして四、五、六

月之に亞ぎ、毎歳十二月より翌春二月までの間は頗る寂寥を感ず。管内の浴客は重に仙臺以南の諸郡より來り、黒川、牡鹿の二郡之に次ぐ。管外にては福島縣の北部過半を占め、山形縣東、西、南の三置賜及び村山の四郡も亦多しとす、近來瀛車開通以來著るしく岩手縣東西磐井郡の浴客を増せりと云ふ。

●交通

◎郵便局 刈田郡遠刈田にありて爲換金事務をも扱ひ、此地に柱函を設く、集配度數は日々午前、午後の二回にして、東京其他各處の書信に、新聞紙に、皆日暮に至れば閱讀するふとを得、但毎年十二月より翌年三月に至る四月間と、來客少きを以て一日一回の配達をす。

◎車馬 先年、遠刈田温泉場に達する道路を改修して行旅の便を與へしも、未だ腕車、馬車を駢行せしむるに足らざるを覺り、明治廿四年更に大土工を興して、岩石を碎き、峻嶮を夷らけ、大河原、白石兩鐵道停車場間に定期往復馬車を開きて、瀛

車便と聯絡を通じ又笹谷街道によりて西の方山形縣への捷路を得たれば、その利便なるまた昔日の比にあらず。

| 普通 | 通車 | 馬賃 | 馬車賃 |
|-----|------|------|------|
| 人力車 | 拾貳錢 | 拾錢 | 五錢 |
| 賃馬 | 〇 | 貳拾錢 | 〇 |
| 馬車 | 拾九錢 | 參拾錢 | 拾九錢 |
| | 五拾錢 | 參拾五錢 | 貳拾四錢 |
| | 五拾錢 | 參拾五錢 | 貳拾五錢 |
| | 七拾四錢 | 川崎通 | 大河原通 |
| | 七拾四錢 | 五拾五錢 | 四拾九錢 |

| 概略 | 里數 |
|------|-----------------------|
| 青根温泉 | 遠刈田へ一里十三丁 |
| 泉場ヨ | 鎌先温泉へ四里十八丁 |
| | 山形縣上ノ山笹谷峠越山形福島町へ藏王山越米 |
| | 七里市へ十一里十六里澤市へ大里 |
| | 藏王山越山相馬中村岩手縣一關 |
| | 八里へ十七里へ三十八里 |

● 詞藻

此地開湯以來已に四百年を経たり、之を古記に徴するに、享保三年より寛政元年に至る八十一年間に、國守及び夫人の枉駕するもの前後凡そ十四回、一門一家の輩に至りては殆んど十三家の多きに至る、故に別に殿閣を造營して青根行殿と稱し以て國守の旅館に充てたり、此間鴻儒名僧の陪從遊浴するもの頗ぶる多く随つてその遺墨も亦尠しとせず、今左に一二を摘載す。

○ 藥師堂奉納和歌 (原作十四首今錄八首)

仙臺中將 吉村朝臣 詠歌

夜落葉 　　むかひ見る月のためとやよあ／＼に落葉をいろく軒の山風
 初雪 　　山のはや降そむる雪のあしたにも麓の里やまたしくらひ
 名所雪 　　雲をさへふり埋むかど明る夜のいふまの山ろ雪にくまなき
 山 　　はる秋の木々やいつれと解ぬまにかはるあかめの雪の山影
 浦 　　うちそよく入江のあしのうら風に夕波かけて千鳥あくまり
 旅 　　青にきはふや野山の末も道ひろく鎖しあき世の旅のゆきゝは
 山家 　　世をうしどのかれし山の奥にたに通ふゝろの道は残りて

閑居 ちにはる勾ふはかりよ人めあき暮の宿はあきとまもあし

◎青根山薬師堂奉納和歌 (原作三十首今録十首)

仙臺中將重村朝臣

年比ねちけわつらはしう氣をふさき動氣あといふものして世のうきふしの事しけ
く國務あど心いれてかうかへぬれはものにくしこゝろもうとくしうなりつゝか
くては末久に國家をたもたむ事もれほつかなくれふやけ私のくすしどりく打あ
つめ療養し待れとはかくしうもさはやきれほゆる事もあしすりやうの温泉あま
たあるあかに柴田郡青根ありける湯はわきてかゝるたくひの病にいみえるしあり
て祖父君もふたゝひ迄ふゝにゆあひ給ひてよりふゝろもさはやき給ふあれば予も
くまはやどくすしのすゝめければ明和三つのだし秋も中半ある比くみそめてより
このかた過にし年迄に四たひこゝにきにけりろの験にやありけむ年をつみ月とか
そへて病もやうくをふたりぬれとともすきはかの物にくしてむすほらるゝや

うに覺ゆる事のみかたかくやかて老のはしめも近つくからにかくてはいつかみの
病のろきてむとれもひありつゝみたまも長月の末つかたより三冬たつはしめ十日
あまり迄浴しぬるほどに五たびのかすにもあれば分て其靈驗あらむ事をねかふと
て南無薬師瑠璃光如来我病全快をなさせ給へといふ事を句の上に置て秋とり冬か
けてのけしきみの里に名ある山川などとりそへて三十首の和歌をさゝけ奉るそ花
にあく瀧水にすむ蛙のみゑにたくひても心をたねとするまゝとをは神も佛もあは
れどうけひきたまはさくらめかも

- ◎何くれとよとわさしけき世のうさも忘れてあかぬ山のゝとけき』
- ◎むかひつゝはく日もあかぬから錦たちぬふ山の木々のいろこさ』
- ◎やまくの紅葉の中にこきませてまゆも一きはいろそろひぬる』
- ◎くたしみるふもとの山のそあたより朝日かゝやく海のさやけさ』
- ◎類いもあらしつめる塵のあり數も讀盡すまですめるつはゆは』

- りつにあふものとや今も笛たけの音にかまひくるみねのまつ風」
- いは根ふみかさるる山をわけ越てかよふやいかに冬のかりひと」
- やますみに馴てそ今はまつのかせ灘のひゝさも夜半のともある」
- はあふさのやまは名のみ冬さひてたゝ白雲をはるのれもかけ」
- またもこむものとは知れど住かれてかへるるみりは深きやま里」

●散策地

○斥候岩 浴場の西、十町にして斥候岩あり、山勢甚だ峻嶮ならずと雖ども、風光の絶美に至りては亦譬ふるにもなく、四望豁然として眼界の達するともろ遠く數十里の外に及び、豆人寸馬の布置、丈山尺樹の濃淡は皆以て畫家の好粉本たり、古來青根温泉は勝景を以て疾病を癒するの語あり、人始めは之を信せず、一たび此に登臨して後、過賞にあらざるを知ると云ふ、山中産する所の白石英は其質透明、玲瓏として希世の珍たり、故に騷人墨客の香愛を享くるものと殊に深し、續記に元明帝

和銅六年五月、柴田郡より白石英を貢ぐ云々、蓋しこれなり、俗にみれを六方石と稱す、而してゐの山最とも霜後觀楓の勝に富む、重村朝臣の古歌に

わけのほる山てふ山の峯のうへにそれと物見のいはすとも忘れ

○不忘山 本名を刈田岳と云ふ、仙南第一の大岳にして山中に役願行開基の藏王権現を祭祀せるを以て俗に藏王山と呼び又歌書にては不忘山といふ、延喜式神名帳の所謂刈田嶺の大社ありしを以て中古以來國民の崇敬尋常にあらず、維新後特に郷社に列せられ水分神社と號す、ゐの山は本土中央大山脈中に秀立する睡眠火山にして、海面上凡う五百六十一丈を抜き、峯影は高く蒼穹に逼りて白雲脚底に來往し、山根は遠く磐城、羽前兩國に跨がりて百里の大觀指呼の間にあり、去れば八月の炎日といへども、天颯颯々として身に爽涼を覺ぬ、濃霧茫茫として衣襟みな濕ふを感ず、試るみに寒暖計を把りて之を測れば、地温は華氏の五十七度二分を示し、氣温は六十三度内外に止まる、みれに登るに澤越、峰越の二道ありて、青根温泉場より正西

三里を距て、その中腹の賽河原よりは一里餘とす、昔し佛教の熾なるや、私かに神號に換ふるに藏王權現の名を以てし、山を冥府に擬して劍ヶ峯、灰塚、三途川等の異名を附せり、絶巖に一小祀あり、すなはち水分神社にして遙かに仙臺城に面す、

(不動の瀑の遠景)



祀下の藏王沼(直經三百三十間)は舊噴火口の湖水に變じたるものにて世俗御竈と尊稱す、其四周は削壁千丈、岩片錯落、山頂より之を下瞰すれば宛然一大播盆に碧水を湛へたるに似たり、ろの峰越の直ちに山徑を登攀するものおれども澤越は沼を一周して絶巖に達するものおればろの危険また前者の比にあらず、夏秋の候近郡の士民茲に賽するもの、毎歳數萬の多きに及ぶ、故に入、九月に至れば随つて浴場も喧囂を極むといふ、綱村朝臣の歌に

くはたみのあはねくみちの奥おれは猶つゝしみをわすれずの山

◎賽河原 は凡そ方半里に亘る不忘山腹の高原にして、巨細の燒石噴岩路傍に堆積散布す、則はち水分神社賽者先導舎れある處あり、これより漸やく山麓に下れば森林一圓に繁茂して、植物界の第三帯及び間帯を成せども、其以上はすなはち第四帯に變ざるを以て短小なる樺林を見、更に進みて馬背を踏み羊腸をわたりその頂上にいたれば、第五帯の下部に屬するが故に、唯僅かに偃松の蜿蜒として羸僂に生ずるあるを見るのみ、而して赤褐色の焦石と、凝灰岩の累層より成れる洞底には、常に斑々たる白雪を存し、到るところ絶えて鳥聲を聴かず、之に反して森林所在の山中には異草生じ、靈禽栖み又最とも礫石に富む、世の博物學に従事する人にして一たび躋攀探檢の勞を辞せずんば、その利するどふる極めて多からん。

◎不動瀑布 青根より賽河原にいたる中間、屏風岩の前峯ある斷崖にかゝる、直下十餘丈、玉を噴き石を碎き淙然として聲をあす、下流はすなはち澄川にして水質清

列あり、蓋しその山中第一の壯觀と稱す、特に霜後に至れば満山錦繡を綴り黄紅相映射して奇勝凡筆に描くべからず、去れども道路や、峻峻にして往々馬背を踰る可からざるより未だひろく世間に知られざるは惜むべしとなす、不動瀑布に隣り五階瀑布ありその水梯階の状をあして墜落するを以て名づく。

○濁川 源を不忘山の噴火舊口ある藏王沼(御竈)より發し、峨々温泉の前を流れ、青根温泉の南を過ぎ、冷水堂下に至り、不動瀧、三階瀧の流末ある澄川と合して松川とあり、宮驛に到りて白石川に會す、水質は多量の硫黄分を含蓄し、其色常に白濁にして一魚族を産せず、概するに峨々以東は河水直下して急瀧となり、回流して奔瀧となり、碧岩に激し、焦石に觸れ、濤々音をあして屏風岩と斥候岩の中間を兩斷す、すなはち天然に柴田刈田の郡界をなすものあり、而して此間最も奇觀あるは懸崖削壁並び峙ち、一帶の樹林は遙かに山腰を擁して互ひに紅を呈し翠を獻し、一奇峯を得る毎に白雲忽ち前を遮り、一危巖を経る毎に瀑布必らず左右より注瀉す

るにあり、斯の如きもの凡そ一里半にして始めて青根の山下に達す、然れども、屢々藤蘿を攀ぢ、急流を渉るの難ありて、夏月と雖も猶四、五時間を費せば眞に冒險健歩の人にあらざるよりは、或ひは危を免れず、世に青根の名石と稱する片石及び白石英は共に多く此河畔より産す。

中將 重村朝臣

瀨をはやみあかれも清く見るものをにみり川とは何名つけ、ん
○有耶無耶關 浴場の北四里餘、野上驛の西十餘町、山形縣に通ずる路傍にあり、今猶ほ古關と稱す、兩巖相壓して恰かも關門の状をなせり、一説に古關址は笹谷嶺の絶巔八町平の中央にして奥羽兩國の境上にあり、東史に「文治五年八月十日、大木戸の戦敗れ主將錦戸太郎國衡、大關山を踰りて出羽に之かんと欲す」とある大關山はすなはち今の笹谷嶺なりと、或ひは然らんか、出羽風土記に有耶無耶關は秋田縣鳥海山の西麓なる岩山にありと、ふれを古歌に徴するに有耶無耶關はまた「いな

青根 温泉 志

ひや」の關、「もやもや」の關、「むやむや」の關とも呼びろの傳説一ならず、去れど山路樹木茂り、濃霧東西を分たざるより行旅みを路に迷はんふとを恐れ己が目標に木の枝を折かけて往來せしより此稱あるもの、如し、又有耶無耶關は遺址よつき數説あれども八雲御抄、藻塩草等による時は陸奥出羽兩國の境上にあると明らかにて、古歌の宿世山、三ツの森等を邦俗笹谷嶺を異稱して賽の河原と云ひ、その頂上の平原を地藏原(又阿彌陀原ともいふ八町平に全し)と云ひ傍はらの山を經森等と稱するに思ひ合すれば此地を指すや蓋し疑かひなきもの、如し。

土御門院御製

たのみ來し人の心もかはるやと問ふても見はやうやむやのせさ

俊頼朝臣

すくせ山をといなむやの關をしもへたて、人に音をあかずらむ

宗良親王

みりふかきとや／＼どりの道とへは名にさへ迷ふむやむやの關

◎笹谷嶺 笹谷驛の正西一里、本縣柴田郡と山形縣東村山郡の境上に横たはる分水嶺にして、絶頂はすまぶる曠濶平遠あり、その石地藏尊なるを以て俗に稱して地藏原といひ、之に隣るを蓮平といふ、今は單に八町平と稱す、直立凡る三百丈遠近の風光みを双眸の中にあつまる、山下に仙人澤あり、古來靈地と稱して未だ人跡の到らざる處多し、八町平の東二町餘りにして、觀音堂あり、すまはち冬季行旅を救護するが爲めに建立せるものにて世に之を笹谷の觀音と云ふ。

仙臺中將 重村朝臣

關据悉しあどさへそれどうやむやの雲を戸さしのみねの通ひ路

◎社 寺

◎温泉神祠 大湯の西にあり、堂は東面九尺造にして文化十二年十月朔日の建立よ係れども、其開基を詳らかにせず、本尊は青銅藥師佛にして驅長尺餘、蓮臺に端坐

青根温泉志

す、堂右の石磴數十級を登れば上に平地あり十數人を坐すべし、景致幽蕭にして前溪後峰の秋色を觀望するに宜し、此に入雲神社を祭る。

◎物産

漆器 玩具 盆器 薪炭 菌蕈類 薇類 山
 獨活 香魚 鰾魚 嘉魚 以上青根の 白石英
 片岩 以上青根二 硫黄 甘露梅 熨斗梅等あり。



三十四

青根温泉志 大尾

明治廿四年七月廿五日印刷 全 年全月十日三版
 全 年全月廿八日出版 明治廿六年十月十九日發行
 明治廿四年九月十一日印刷 全 年全月廿二日四版
 全 年全月十四日再版 明治廿七年十月十四日五版印刷
 明治廿五年九月八日印刷 明治廿七年十月十八日五版發行

正價金九錢

版權所有

著作兼發行者 宮城縣仙臺市土樋十三番地 永澤小兵衛

印刷者 宮城縣仙臺市木町通三十九番地 佐藤金吾

印刷所 宮城縣仙臺市南町十二番地 千葉活版所

宮城縣陸前國柴田郡
青根溫泉場溫泉宿

不忘閣

佐藤仁右衛門

終